

平成 25 年度病虫害発生予報第 4 号

平成 25 年 6 月 6 日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要

区 分	農作物名	病 害 虫 名	発生時期	予想発生量
普通作物	イ ネ	いもち病 (葉いもち)	平 年 並	平 年 並
		縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)	やや早い	平 年 並
		ニカメイガ	平 年 並	やや少ない
		イネミズゾウムシ	—	やや少ない
果 樹	ナ シ	黒斑病	平 年 並	やや多い
		黒星病	平 年 並	平 年 並
		輪紋病	平 年 並	平 年 並
		アブラムシ類	平 年 並	平 年 並
		ニセナシサビダニ	平 年 並	やや多い
	シンクイムシ類	やや早い	平 年 並	
カ キ	落葉病	平 年 並	平 年 並	
	カキノヘタムシガ	平 年 並	平 年 並	
ブドウ	べと病	やや早い	やや多い	
	チャノキイロアザミウマ	平 年 並	平 年 並	
	ハマキムシ類 (チャノココクモンハマキ)	平 年 並	やや少ない	
野菜・花き	スイカ、メロン	つる枯病、炭疽病	平 年 並	平 年 並
		うどんこ病	平 年 並	平 年 並
		アブラムシ類	平 年 並	平 年 並
		ハダニ類	平 年 並	平 年 並
	イチゴ (育苗期)	うどんこ病	平 年 並	平 年 並
		炭疽病	平 年 並	平 年 並
		アブラムシ類	平 年 並	平 年 並
	ハダニ類	平 年 並	平 年 並	
		平 年 並	平 年 並	
	ネ ギ	さび病	平 年 並	平 年 並
黒斑病		平 年 並	平 年 並	
ネギアザミウマ	平 年 並	平 年 並		
	ネギハモグリバエ	平 年 並	平 年 並	
ブロッコリー	コナガ	平 年 並	平 年 並	
シ バ	葉腐病 (ラージパッチ)	平 年 並	平 年 並	
	シバツトガ	平 年 並	平 年 並	

気象予報（抜粋）

1 か月予報（6月2日～7月1日：6月1日、広島地方气象台発表）

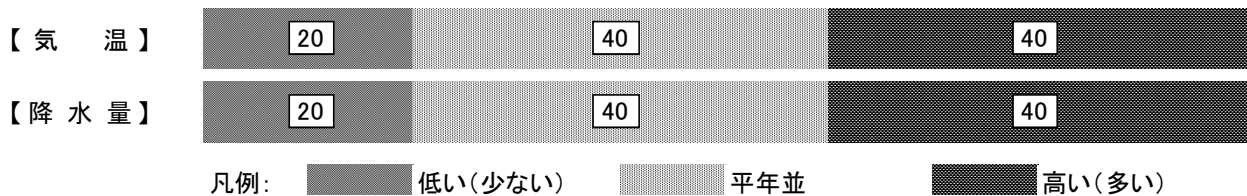
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

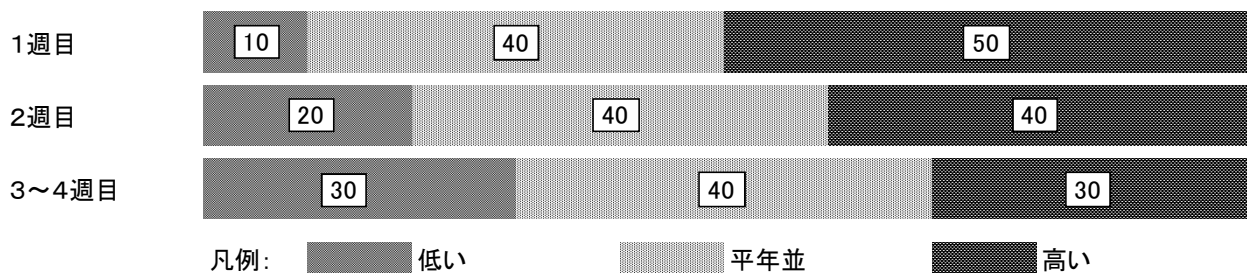
向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



普通作物

[イネ]

1 いもち病（葉いもち）

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 前年の穂いもちの発生は平年並であったため、種子の保菌率は平年並と予想される。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 移植後は、ほ場をよく観察して本病の早期発見に努め、急性病斑がみられた時は、病虫害防除指針などを参考にして、直ちに治療効果のある粒剤、粉剤又は水和剤で防除を行う。

イ コシヒカリ、ひとめぼれなどの本病に弱い品種、多肥、遅植えなどの条件では特に発生しやすいので、注意する。

ウ 補植用置き苗が本田での発生源となることが多いので、補植後の残り苗は速やかに処分する。

2 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

（1）予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	やや早い
発生量	平年並

（2）予報の根拠

ア これまでの気象経過、向こう1か月の気象予報から、本病の媒介虫であるヒメトビウンカ第2世代幼虫のふ化最盛期は、平年よりやや早い6月末～7月第1半旬になると予想される。

イ 前年の本病の発生量は平年並であった。

ウ 前年のヒメトビウンカの発生量は平年並であった。また、これまでの気象経過、向こう1か月の気象予報から、本種の発生量は平年並と予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 本病の常発地で、ヒメトビウンカに登録のある育苗箱施用剤を使用していない場合には、第2世代幼虫のふ化最盛期に、粉剤、粒剤などを散布する。使用薬剤については、病虫害防除指針などを参考とする。

イ ヒメトビウンカはイネの葉色が濃いほ場に発生しやすいので、窒素過多にならないよう注意する。

3 ニカメイガ

（1）予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	やや少ない

（2）予報の根拠

ア これまでの気温の推移、及び向こう1か月の気象予報から、本虫の発生時期は平年並と見込まれる。

イ 5月第6半旬までの予察灯及びフェロモントラップへの総誘殺数は、平年に比べてやや少なかった。また、これまでの気象経過、向こう1か月の気象予報から、本種の発生量はやや少ないと予想される。

（3）防除上注意すべき事項

本種に登録のある育苗箱施用剤を使用していないほ場において、若齢幼虫期（6月第4～5半旬）に要防除水準を超えた場合には、病虫害防除指針などを参考にして、粉剤などを散布する。なお、6月第4～5半旬における本種の要防除水準は、葉鞘変色莖率5%である。

4 イネミズゾウムシ

（1）予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	やや少ない

（2）予報の根拠

5月第5半旬までの予察灯への総誘殺数は、平年に比べてやや少なかった。

（3）防除上注意すべき事項

本種に登録のある育苗箱施用剤を使用していないほ場において、要防除水準を超えた場合には、病虫害防除指針などを参考にして、粒剤、粉剤などを散布する。なお、本種の要防除水準は成虫寄生密度0.5頭/株である。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場における5月第6半旬の胞子飛散数は、平年と比べて多かった。

イ 6月上旬現在、県予察ほ場において本病の発生が認められる。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 6月になると新梢葉が多くなり、薬液の付着むらが出やすいので、新梢の先端まで薬液が十分かかるよう注意する。

イ 薬剤はチウラム水和剤（トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル）

500倍とポリオキシシリンAL水和剤1，500倍の混用液、アントラコール顆粒水和剤500倍液、ナリアWDG2，000倍液などを使用する。

ウ 園内の風通しをよくするため、下草の管理を徹底する。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場における開花期以降の果そう基部病斑からの分生子の飛散数は平年を下回った。

イ 県内の一部では発生が多い園が認められている。

ウ 6月上旬現在、葉や幼果に発病が認められているナシ園では、今後、降雨が多くなると発病が増加することが予想される。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病した葉や幼果は取り除き、園外に持ち出し処分する。

イ 赤ナシの有袋栽培では、袋掛け直前に必ず薬剤散布を行って袋掛けを行う。

ウ 薬剤はアントラコール顆粒水和剤500倍液、ナリアWDG2，000倍液などを使用する。また、現在発生が認められる園では、防除効果の高いEBI剤（アンビルフロアブル1，500倍液、スコア顆粒水和剤4，000倍液、オンリーワンフロアブル4，000倍液など）を追加散布する。

エ EBI剤の散布にあたっては、薬剤耐性菌の発生を回避するため、EBI剤以外の薬剤との輪番散布とする。

オ 降雨が多い場合は、薬剤散布間隔が空き過ぎないように注意する。

3 輪紋病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 伝染源となるいぼ病斑の発生の多い園が一部のナシ園で認められる。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果実の発病は袋掛けで防げるが、袋掛けが遅れると発生が増加するので、摘果が終わり次第、早めに袋掛けを行う。

イ 果実及び枝の発病を抑えるため、梅雨期の薬剤散布を徹底する。

ウ 薬剤はオキシラン水和剤600倍液、ナリアWDG2,000倍液などを使用する。

4 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月第6半旬現在、県予察ほ場におけるワタアブラムシの平均寄生新梢率は、6.6%（平年：7.2%）、ユキヤナギアブラムシの平均寄生新梢率は、8.8%（平年：8.1%）で平年並の発生量となっている。

イ 5月下旬の巡回調査の結果、アブラムシ類の発生量はやや少なかった。

(3) 防除上注意すべき事項

発生が多いほ場では、アドマイヤーフロアブル5,000倍液またはウララDF4,000倍液などを散布する。

5 ニセナシサビダニ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月上旬現在、県予察ほ場におけるニセナシサビダニの新梢先端葉1枚当たりの寄生個体数は442.4頭（平年：399.3頭）で平年並の発生量となっている。

イ 向こう1か月の気象予報から、本種の発生にやや好適であり、発生量はやや多く、発生最盛期は平年並の6月中下旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 第2回目の防除時期は6月中旬頃を目安とする。

イ 薬剤はハチハチフロアブル2,000倍液などを使用し、ニセナシサビダニが寄生している新梢先端部に薬液が十分付着するように散布する。

6 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア ナシヒメシンクイの越冬世代成虫(第1回成虫)の湯梨浜町における発生盛期は、平年よりやや早い4月中旬となった。

イ 現地9地点で調査しているナシヒメシンクイのフェロモントラップにおける誘殺数は、ほぼ平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、ナシヒメシンクイの第1世代成虫(第2回成虫)の発生盛期は平年よりやや早い6月上～中旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 受粉樹に残っている果実など(裸果)はシンクイムシ類の発生源となるので早急に除去する。

イ 防除暦を参考に定期的な防除を行う。

[カ キ]

1 落葉病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 昨年の本病の発生量は平年並であったため、越冬菌密度についても平年並であると見込まれる。

イ 本病は連続降雨により発病が助長される。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、落花始め～生理落果期に、有機銅水和剤（キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル）1，000倍液、デランフロアブル2，000倍液、マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤又はペンコゼブ水和剤）600倍液などを10日間隔でそれぞれ1回ずつ散布する。

2 カキノヘタムシガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、予察灯（河原試験地）における誘殺数は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、成虫の発生最盛期は平年並の6月上旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 落葉病の防除時期に合わせてパダンSG水溶剤1，500倍液などを散布する。

イ なお、パダンSG水溶剤は、開花後に発生するチャノキイロアザミウマにも効果がある。

[ブドウ]

1 ベと病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、一部の園で葉の発病が散見されている。

イ 本病の発生は平年よりやや早く認められた。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病は連続降雨により発病が助長され、施設栽培ではハウスの谷部など雨に当たりやすい場所や多かん水園での発生が多い。

イ 果粒が大豆大以上になると薬剤散布によって果粉が溶脱するので、果粒が小豆大までに新梢先端や副梢に十分量散布する。薬剤はランマンフロアブル2，000倍液、ベトファイター顆粒水和剤3，000倍液などを輪番散布する。

2 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、県予察ほ場の黄色粘着トラップによる本種の誘殺は認められない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生が増加する時期は、平年並の6月上～中旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

例年発生の多い園では、モスピラン顆粒水溶剤4,000倍液、バリアード顆粒水和剤4,000倍液などを6月上旬から中旬に必ず散布する。ただし、果実に直接かかると果粉が溶脱する恐れがあるため、果房にかからないようにする。

3 ハマキムシ類 (チャノココクモンハマキ)

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、県予察ほ場の性フェロモントラップによるチャノココクモンハマキの誘殺数はやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生が増加する時期は、平年並の6月下旬～7月上旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア チャノココクモンハマキの発生が多い園では、サムコルフロアブル10の5,000倍液を散布する。

イ 防風樹のサンゴジュは本種の発生源となるので注意する。

野 菜

[スイカ、メロン]

1 つる枯病、炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場(スイカ)において、つる枯病及び炭疽病の発生は認められていない。

イ 本病は降雨によって発病が助長される。向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア トンネル内が過湿にならないように換気を行う。

イ 雨滴のあたる箇所や株元から発病しやすいので、雨がなるべくあたらないようにトンネルの開閉を行う。また、薬剤散布は株元にも薬液がよくかかるように丁寧に行う。

ウ 雨の日が続くと発病が増加するので、散布間隔を短くし、雨のやみ間に防除する。

エ スイカでは、ジマンダイセン水和剤600倍液、アントラコール顆粒水和剤600倍液、ダコニール1000の1,000倍液などを散布する。メロンでは、ジマンダイセン水和剤600倍液などを散布する。

2 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場（スイカ）において、本病の発生は認められていない。

イ 本病は、25℃前後の気温と乾燥条件で発病が助長される。向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア すでに発病のみられるほ場では、スイカ、メロンともにトリフミン水和剤5,000倍液などを散布する。

イ つる枯病も発生している場合には、スイカではポリベリン水和剤1,000倍液、メロンではポリベリン水和剤1,500倍液などを散布する。

3 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場（スイカ）におけるアブラムシ類の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスの換気部分や出入口には寒冷紗被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止に努める。

イ スイカのハウス栽培で収穫間近なものは、アドマイヤー水和剤2,000倍液を散布する。トンネル栽培では、肥大中期に発生がみられる場合にはアドマイヤー水和剤2,000倍液、収穫前にはダントツ水溶剤4,000倍液などを散布する。

ウ メロンではアドマイヤー水和剤2,000倍液などを散布する。

4 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場（スイカ）におけるハダニ類の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

スイカ、メロンともに、発生初期にバロックフロアブル2,000倍液を散布する。その後発生が見られた場合はマイトコーネフロアブル1,000倍液、ダニサラバフロアブル1,000倍液などを散布し、多発した場合にはコロマイト乳剤1,000倍液を散布する。

[イチゴ（育苗期）]

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場の育苗床における本病の発生量は平年並である。

イ 本病は気温が20℃前後のやや低温条件で発病が助長される。向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本ほに病原菌を持ち込まないために、特に6～7月の育苗期間中の防除を徹底する。

イ 防除にあたっては、葉裏へも薬剤が付着するように丁寧に散布を行う。

ウ 発病初期まではベルコート水和剤1,000倍液などを散布する。すでに発病している場合には、カリグリーン800～1,000倍液と、トリフミン水和剤5,000倍液などを混用散布する。

2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場の育苗床において、本病の発病は認められていない。

イ 本病は高温多雨で発病しやすい。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗期間中、罹病性品種については、下記の薬剤を定期的に散布する。なお、薬剤散布にあたってはクラウン部分、葉柄、托葉、ランナーにも薬液が付着するように丁寧に散布する。下葉かきによる傷口、ランナーの切り口などからも感染するので、下葉かきの直後にも薬剤散布を行う。育苗初期の防除を徹底し、発病株は除去する。

イ 育苗初期は、アミスター20フロアブル2,000倍液、ゲッター水和剤1,000倍液などを散布する。なお、アミスター20フロアブルは薬害が出やすいため、展着剤を加用しない。

ウ その後は、ベルコート水和剤1,000倍液、デランフロアブル1,000倍液、アントラコール顆粒水和剤500倍液、ジマンダイセン水和剤600倍液などを、7～10日間隔で予防散布する。

3 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場の育苗床におけるアブラムシ類の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤はベストガード水溶剤2,000倍液、サンヨール500倍液などを散布する。

4 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場の育苗床におけるハダニ類の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

発生初期にサンヨール500倍液、アーデント水和剤1,000倍液、コテツフロアブル2,000倍液などを散布する。発生量が多い場合はコロマイト乳剤1,000～1,500倍液（親株床での登録）などを散布する。

[ネギ]

1 さび病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量はほぼ平年並である。

イ 本病は比較的低温で降雨が多い場合、発病が助長される。向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 6月に収穫する作型で、発病の多いほ場では、アミスター20フロアブル2,000倍液を散布する。

イ 7月以降に収穫する作型では、6月上旬からオンリーワンフロアブル1,000倍液、ラリー乳剤4,000倍液などを散布する。

2 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。

イ 本病は気温が25℃前後で、降雨が多い場合、発病が助長される。向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 根傷みや肥料不足になると発病しやすいので、排水対策を実施し、肥培管理に注意する。

イ 防除薬剤は、ポリベリン水和剤1,500倍液、ロブラール水和剤1,000倍液などを散布する。

3 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場での本種の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 定植時には、ジノテフラン粒剤（アルバリン粒剤又はスタークル粒剤）

6 kg/10 a の株元散布、アクタラ粒剤5の6～9 kg/10 a の作条混和、ジノテフラン水溶剤（アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤）50倍液のセルトレイ灌注などの処理を行う。

イ 土寄せ時に、ダントツ粒剤6 kg/10 a、オンコル粒剤5の6 kg/10 a を株元散布する。

ウ 散布剤はハチハチ乳剤1,000倍液、オンコルマイクロカプセル1,000倍液などを散布する。

4 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場での本種の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 定植時の処理についてはネギアザミウマの項参照。土寄せ時にはダントツ粒剤6 kg/10 a の株元散布、ベストガード粒剤6 kg/10 a の株元処理を行う。

イ 散布剤は、アグロスリン乳剤2,000倍液、オンコルマイクロカプセル1,000倍液などを散布する。

[ブロッコリー]

1 コナガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（東伯郡北栄町）における本種の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

6月中旬以降収穫のブロッコリーで幼虫の発生がみられる場合、スピノエース顆粒水和剤5,000倍液、ゼンターリ顆粒水和剤1,000～2,000倍液などを散布する。

[シ バ]

1 葉腐病（ラージパッチ）

(1) 予報の内容

発生時期	平 年 並
発生量	平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。

イ 本病は降雨によって発病が助長される。向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病の発生前にセレントーフ顆粒水和剤0.5 g/m²を0.1～0.5 L/m²散布する。

イ すでにパッチがみられる場合は、発病部位を中心にグランサー水和剤500倍液0.5 L/m²、バリダシン液剤5の500倍液0.5～1 L/m²などをスポット散布する。

2 シバツトガ

(1) 予報の内容

発生時期	平 年 並
発生量	平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場における本種の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

幼虫による被害がみられる場合は、ダイアジノン乳剤40の1，000倍液0.3～1 L/m²、ジェイエース水溶剤1，000倍液0.3 L/m²、スミチオン乳剤1，000倍液0.3～2 L/m²などを散布する。

[おしらせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(http://www.famic.go.jp/)

なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

<鳥取県病虫害防除所ホームページ>

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病虫害発生予察情報、フェロモントラップ調査結果(ナシのシンクイムシ類)などの参考情報、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

<お問い合わせ>

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260

鳥取県病虫害防除所

(TEL：0857-53-1345、E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp)

もしくは

鳥取県農林総合研究所農業試験場環境研究室

(TEL：0857-53-0721、FAX：0857-53-0723)

果樹・野菜・花き関係

〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048

鳥取県農林総合研究所園芸試験場環境研究室

(TEL：0858-37-4211、FAX：0858-37-4822)

※予報第5号の発表は、7月4日(木)の予定です。